

至るまで、その傾向は変わらないようですが、セタフィールドの主張が正しければ、聖書の主張がますます裏づけられることとなります。天文学界、物理学界がセタフィールドの主張を無視する背後には、進化論を擁護するために、無限大に引きのばされてきた何百億年という宇宙年齢が一気に縮小され、若い宇宙、地球が容認されてしまうことに対する嫌いが、創造論を否定する多くの学者たちの間で皆無とはいえないようです。

放射性元素の崩壊速度、減衰率は一定ではなく、直接光速に関係しているため、光速が早いほど減衰率は速く、光速が遅くなれば減衰率も遅くなることとなります。もし現在の減衰率が古来、一定不変であると仮定するならば、現在の光速から割り出された天地の年数は非常に長く、古いことになり、進化論者にとっては格好の条件設定になるのです。しかし、放射性元素の減衰率が時代、大気条件によって異なっているとすれば、古い地球を支持するために用いられてきた放射性炭素年代測定法、一大気中の放射性炭素同位体の相対量が、地球の歴史を通して一定であったとする仮定に依存する一によるデータは見直されなければならないことになるのです。今日、速度や重力の影響で時間の進み方が遅くなることは、地上の時計とはるか上空を飛行する衛星などに搭載された時計との比較実験で確認されているようですが、1980年代にトム・バン・フランダーンは、「原子時計」—原子や分子が決まった周波数の電磁波を吸収する性質を用いて高精度な時間を計測する時計—の方が、「物理的時計」—重力をはじめ、地や月の自転、公転速度の影響を受ける、今日私たちが用いている通常の時計—より遅くなっていることを観測し、データを注意深く調べた結果、光と違って重力に収差はないが、「重力の速度」は無限ではなく、現在の光速より因数 2×10^{10} だけ大きいと結論づけたのです。この節は非主流理論とみなされ、受け入れられなかったのですが、もしバン・フランダーンの主張が受け入れられることになれば、地質学をはじめ科学全般がこれまで認めてきたすべての年代測定法の見直しを迫られることになり、重大な局面を迎えることになるのです。バリー・セタフィールドが、最大に見積もられた「ハッブル定数」を基にして割り出した数値によれば、創造当初の光速は現在の光速より 2.54×10^{10} 倍速かったとのことで、最新の数値では、聖書の語る創造の二日目、光創造時の光速は秒速 $6 \times 10^{18} \text{m}$ をわずかに下回る速さであったとのことです。過去三百年間に測定された光速の数値、ほぼ 2000BCE にさかのぼる放射性炭素年代測定法で得られた数値の修正、創造時からほぼアブラハムの時代までの期間に匹敵する遠方の銀河からの光の赤方偏移を量子化しての観測値等に基づいて、今日、「天地創造以降、宇宙の直径は不変（アインシュタインが唱えたように、固定、静的宇宙）であるが、光速は急激に減速して、現在の数値に至った」という筋書きを、かなり自信をもって主張できるようになって来ているようです。年数とともに宇宙は自由空間の誘電率と透磁率が増え、光速は減速する一方で、重力の速度はそれらの要因に拘束されないとし、アインシュタインが唱えた「重力の速度は有限で光速に等しい」という一般性相対性理論に従えば、現在の重力の速度は創造時の最初の光の速度のままということになるのです。今年九月には、素粒子ニュートリノの速度が光速を上回るという相対性理論を覆す測定結果が得られたことが報道されましたが、物理学界は受け入れがたい研究発表に揺れ動いているようです。バン・フランダーンやセタフィールドが発表したことは、今のところ天文学界、物理学界では受け入れられていないようですが、今後、真理は加速度的に明らかにされていくことでしょう。

今月は、神が創造された宇宙の物理的側面を、素人の立場でこの世の視点から考察してみました。聖書、生ける真の神の言葉には、「天を延べ広げる」という用語が少なくとも十七回用いられています。新旧両訳聖書には、天は裂くことができ、衣のようにすり切れ、取り換えられ、巻き物のように巻かれ、消え、外套のように巻かれ、揺るがされ、焼け尽されると表現されています。これはまさに量子力学が主張している宇宙の状態を描写したもので、今日、科学者たちは観測、計測、理論展開を通して、宇宙が永遠不滅、不変ではなく、刻々と変化してきたこと、やがては「宇宙の熱死」が起こる、一宇宙の廃熱で地球は熱地獄と化し、天体すべてが消滅する—ことを認めています。これはまさに、ペテロが「しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きを立てて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます……その日が来れば、そのために、天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます」（ペテロ第二 3: 10-12）と預言したことの成就です。しかし同時にペテロは、人々が今、朽ち果てる肉の身体で生きている間にイエス・キリストを自らの救い主として受け入れるなら、信じる者には、引力（重力）の影響を全く受けない、キリストと同じ甦りの身体が与えられ、「**神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地**」に住むことができること、すなわち、「永遠の時代」の到来をも預言しているのです。

冒頭に引用した聖句は、神が天地を創造されたとき、天界の御使いが喜んだこと、その創造の様子を目撃していない人は、天地に関してほとんど無知である、—まさに宇宙の 5%しか知らない—ことが記されています。聖書の中で最古のヨブ記には、時間、物理的宇宙の外におられる神が、節理に従って人間原理の宇宙を造られ、人をその中心に置かれたこと、大小、明暗さまざま星の配置で天空に描かれた人類救済の大絵巻「**十二宮**」、太陽、月、諸惑星、大自然、動植物のすべてが人の最善のため創造されたことが見事に描かれています。人を誘惑する悪しき者サタンの正体も「神ご自身しか殺すことのできない生き物」として描かれており、ヨブに神が投げかけられた七十七の質問の多くは、文明社会に生きる私たちにとっても依然として謎であり、他方で、数ある星群の中で、引力作用によって結びつけられているただ二つの星座、すばる座とオリオン座の特記ははじめヨブの時代よりはるか後世に発見された少なくとも十五の科学的発見にヨブ記は言及しているのです。現在が過去の鍵を握っていると考える地質学論「**斉一説**」では説明できない昨今の諸現象は、ヨブ記が主張するように、自然界を神が御目的にしたがって支配、制御しておられる証拠なのです。